

C'n

SCENE
NEWS

CHIBA CITY MUSEUM OF ART



雪舟《山水図(傲玉潤)》岡山県立美術館蔵 重要文化財

Topics

岡山県立美術館所蔵 雪舟と水墨画

カラーズ—色彩のよろこび

新収蔵作品展 写楽、夢二、そして房総ゆかりの作家たち

千葉アートネットワーク・プロジェクト2008 ～ひらがなアート～チバトリ

岡山県立美術館所蔵

雪舟と水墨画

Masterpieces of Ink Painting from the Okayama Prefectural Museum of Art

「岡山県立美術館所蔵 雪舟と水墨画」展に見る日本絵画の特質
—中国と日本、そして東アジアの中の日本

岡山県立美術館は「岡山の美術」を展示活動の主な方針として岡山ゆかりの芸術家に焦点をあてて作品収集に取り組んできた。特に重要な画家雪舟については、ルーツとなる作品としての中国絵画、弟子たちの作品、その流れを受け継ぐ作品をも収集している。雪舟以降にも武人画家の宮本武蔵、江戸時代中期の京都で起こった画派の四条派に属する柴田義董、岡本豊彦、南画の浦上玉堂など多くの画家が出た。明治期には多くの洋画家を輩出し、明治時代の洋画のコレクションも優れ、福武コレクションの寄託によって国吉康雄についてもまとまっているが、今回の展覧会は中国、日本の水墨画を中心とした絵画で構成している。その理由は、千葉市美術館のコレクションの性格による。当館のコレクションは江戸時代以降の絵画(含む版画、特に浮世絵)と現代美術を主としており、企画展であってもコレクションに関連した作品を展示する機会が多い。普段の館の活動とつながりがあって、しかもそれを補完するような内容として、江戸時代までの絵画を中心として構成したのが今回の展覧会である。その結果、岡山県立美術館コレクション名品展、ではあるのだが、全体として中国と日本、そして東アジアの中の日本という日本絵画の特質をうかがわせる展覧会となった。

雪舟(1420-1506)は応仁元年(1467)から文明元年(1469)にかけて遣明使に加わって中国を訪れた。雪舟が学んだ周文の画風も中国南宋の院体山水画(中国の宮廷に置かれた絵画制作のための組織である画院の画家、特に南宋の馬遠、夏珪などの画風の山水画をいう)にならうものであった。例えば牧谿「老子図」(図1)に將軍足利義満の鑑蔵印「道有」があるように、室町時代には中国絵画が重んじられていた。雪舟以前の水墨画ももちろん中国の影響を強く受けている。当時重視された宋元の中国絵画(図2)に加えて、実際に中国を訪れた雪舟は同時代、明代の中国絵画の画風をも摂取し、消化して自らの画風を確立した(図3)。雪舟を庇護した山口の大内氏は朝鮮との貿易も行っており、雪舟は、中国絵画だけではなく、朝鮮で作られた中国風の絵画も見ることができただろう。雪舟は日本の画家だが、中国絵画史、また中国を含む東アジアの絵画史の中にも位置づけうる。



図1 牧谿《老子図》岡山県立美術館蔵



図2 玉澗《廬山図》岡山県立美術館蔵 重要文化財



図3 雪舟《山水図(傲玉澗)》岡山県立美術館蔵 重要文化財

宮本武蔵(1584-1645)は遅れてきた戦国武人であり、寛永17年(1640)に熊本の細川家に客分として迎えられた後、余技の水墨画に励んだ。その画風は「布袋竹雀枯木翡翠図」(図4)にみるように中国南宋の画院画家梁楷の減筆体にならったものである。

江戸時代中期、蘭書の輸入が解禁され、蘭学が起り、絵画においても西洋の影響がみられるようになったが、依然として中国文化の影響も大きかった。同時代の中国絵画や中国風の画風の絵が「唐画」と呼ばれてもはやされていた。中国の文人画の画風を取り入れてこのころ起こった日本の南画(文人画)も唐画^{からえ}に入る。南画では岡山からは浦上玉堂(1745-1820)(図5)、広瀬臺山(1751-1813)が出た。玉堂は中国絵画のみならず朝鮮絵画をも学び、日本在住の朝鮮文人との交流もあったらしい。淵上旭江(1753-1816)は岡山から大坂へ出て活躍した画家だが、当時の大坂の状況を記す享和2年(1802)刊『浪華なまり』に唐画の画家として名があがっている。岡山出身の柴田義董(1780-1819)と岡本豊彦(1773-1845)は京都で四条派の画家として活躍した。四条派は、南画の与謝蕪村、次いで円山応挙に学んだ呉春の一派で、わかりやすく写実的な円山派の画風をより洗練させている。天明4年(1784)版の京都の案内書『京羽二重大全』では円山派の円山応挙と源琦が唐画師として載っており、円山派が唐画と見なされていた。円山派と画風の近い四条派についても場合によっては唐画と見なされただろう。義董が描いた「西園雅集図」は中国文人を題材にしており、南画家も描いた主題である。豊彦の山水画も南画的な手法が加えられている。四条巴派の作品にも中国への憧れがうかがえる。

富岡鉄斎(1837-1924)は文人として明治大正を生きた。京都出身だが岡山をたびたび訪問したり、岡山の人物と親交があったりしたため、岡山県立美術館のコレクションに含まれている。儒者として鉄斎のバックグラウンドは中国と深く関わっており、文人画家としても中国絵画の影響下にある。

雪舟を核として形成された岡山県立美術館所蔵の水墨画コレクションは、雪舟自身の性質と同様に中国と日本、東アジアの中の日本という日本絵画の特質をよく伝える。この特質は、江戸時代の絵画の特質でもあるが千葉市美術館の所蔵品では体系的に示すことが難しく当館で展示する今回の展覧会は非常に貴重な機会である。是非この機会にご覧くださいませようお願い申し上げます。

[学芸員 伊藤紫織]



図4 宮本武蔵《布袋竹雀枯木翡翠図》岡山県立美術館蔵



図5 浦上玉堂《山澗読易図》岡山県立美術館蔵

岡山県立美術館所蔵 雪舟と水墨画

2008年12月20日(土)▷2009年1月25日(日)

10:00—18:00(金・土曜日は20:00まで)

*入場受付は閉館の30分前まで

【休館日】 年末年始(12月29日~1月3日)、1月5日(月)

【観覧料】 一般 800(640)円

高校・大学生 560(450)円

小・中学生 無料

* ()内は前売、団体30人以上および市内在住60歳以上の料金

*前売券は、千葉都市モノレール「千葉駅」「千葉みなと駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口(1月25日まで)にて販売

参考文献

戸田禎佑『日本美術の見方』(角川書店 1999年)

「明代絵画と雪舟」展図録(根津美術館 2005年)

「朝鮮王朝の絵画と日本」展図録(読売新聞大阪本社 2008年)他

カ ラ ー ズ

— 色彩のよろこび

今年度の所蔵作品展は、同時開催の企画展と何らかのつながりのあるテーマを設定して開催してまいりました。水墨画の名品の揃う「岡山県立美術館所蔵 雪舟と水墨画」と同時開催となる本展は、「カラーズ—色彩のよろこび」と題してみました。墨色の濃淡のなかに万象をとらえようとする水墨画の世界とは対照的な、色彩のよろこびに満ちた作品を集め、「彩る」という行為が見せる諸相をご覧ください。

展示は、あらゆるものを虹色に変えてしまう饜嘔の作品から始まります。塗料を生のままぶちまけたような村上三郎の作品や鮮烈な色の響きあいが印象的な辰野登恵子の作品など、まずはにぎやかな色の洪水—まさに色彩のよろこびに浸っていただきたいと思います。

第2部では、近世・近代日本の版画から、彩色にこめられた工夫の数々を観察します。たとえば非売品の配り物である摺物が見せる金や銀を贅沢に用いた構成、藍色のグラデーションだけで対象を描き切る藍摺の面白さ、あるいは色を変えることで同じ版木から全くイメージの違う作品を生む試みなど。色は何かを再現するためだけに選ばれるのではなく、遊びや計算が大いに介在していることがわかりいただけるでしょう。

制作された時代を問わず、ある色が強烈な印象を残す作品は少なくありません。続く第3部では「赤」が特別な色として使われた作例を並べてみます。浮世絵版画から江戸中期の紅摺絵や明治期のいわゆる赤絵を、近代日本画からは横尾芳月と小早川清の描く赤衣の美女たちを、さらに戦後の作品から、桂ゆきによる綿を紅絹でくるんだコラージュなどを選び、それらの「赤」が持つ共通項や相違点を探ります。

展示の最後では、ある時代特有の色をお見せします。題して「幕末明治の極彩色」。三代歌川豊国や落合芳幾、豊原国周、月岡芳年らの肉筆と錦絵を集め、派手できわどく刺激的な色遣いから、めまぐるしく転変した時代の相を感じていただければと思います。

「色」という言葉にそれこそ「いろいろ」な意味があるように、色彩が語るストーリーは限りなく、本展が提案する視点はその一端にすぎません。けれども「なぜこの色が選ばれたのか」に思い巡らすことは、作品を視る楽しみを必ずやひろげてくれるはず。色遣いにまつわる作り手たちのさまざまなたくらみ、その冒険によって新たな世界が拓けることのよろこびを、ぜひとも会場で体感してみてください。

[学芸員 西山純子]



村上三郎《作品》昭和39年(1964)
千葉市美術館蔵



小早川清《赤いドレス》昭和(1925-89)初期
千葉市美術館蔵



溪斎英泉《当世すかたのうつし画 茂門佳和》
文政-天保期(1818-44) 千葉市美術館蔵



落合芳幾《婦女風俗図》江戸時代末期 千葉市美術館蔵

カラーズ — 色彩のよろこび

2008年12月20日(土)▷2009年1月25日(日)

10:00—18:00(金・土曜日は20:00まで)

* 入場受付は閉館の30分前まで

〔休館日〕 年末年始(12月29日~1月3日)、1月5日(月)

〔観覧料〕 一般 200(160)円

高校・大学生 150(120)円

小・中学生 無料

* ()内は団体30人以上の料金

* 同時開催「岡山県立美術館所蔵 雪舟と水墨画」展のチケットをお持ちの方は無料

新収蔵作品展

写楽、夢二、そして房総ゆかりの作家たち

今年度最後の所蔵作品展は、平成15年度以降に収集した絵画、版画、書、写真、彫刻、立体作品を、8・7階展示室を広々と使ってご覧いただきます。新収展の開催は4年ぶり。これまでにご紹介した作品もありますが、寄贈作品などその多くが初公開となります。以下、見所のいくつかをご案内しましょう。

当館の得意とするジャンル、錦絵からは東洲斎写楽《三代目大谷鬼次の江戸兵衛》の登場です。両手をぐっと突きだした独特のポーズをご記憶のかたも多いはず。スター絵師・写楽の数ある作品のなかでも本図は代表作。当館蔵品はコンディションも上々です。あわせてご覧いただくのは歌川広重と渓斎英泉による《木曾海道六拾九次》より27点。もとは巻物に仕立てられていたらしく少々くたびれた姿で館にやって来ましたが、専門家の手厚い修復を経て見事によみがえりました。

早いもので当館も開館して14年目。活動を応援して下さるかたにも恵まれ、作品をまとまった数でご寄贈いただく機会も増えました。そのなかから今回は、楠原豊松氏のコレクション約40点を一堂に展示いたします。中村岳陵《橋》をはじめ、近世から近代にかけての日本画、洋画、さらには中国絵画と内容はさまざま、いかにもコレクターの身近で親しまれた作品らしい、季節感あふれる風景画の数々をお楽しみください。

明治期の末以来今なお人気の衰えない竹久夢二の作品からは、初期から中期にかけてのいわゆる「夢二本」16冊と便箋3種を展示いたします。夢二の挿絵画家としての、またデザイナーとしての豊かな天分を物語るこうした一群は、近年では肉筆画よりもむしろ評価の高いもの。刊行された当時の反響の大きさ、うっとりとした手にとる若者たちの姿を想像しながらご覧いただきたいと思います。

千葉市の美術館として、地元の作家を調べることは大切な仕事。わずかずつながら所蔵品も増えてまいりました。たとえば昭和のはじめに大網へ移住し、戦後は稲毛に暮らした田岡春径の《秋晴》。鮮やかな緑と青の交響が魅力的です。ほかにも石井光楓の滞仏期の作品や山谷鉄一の二科会出品作、遠藤健郎の戦後風景、深沢幸雄の初期銅版画、石井雙石や種谷扇舟の書などを展覧し、房総ゆかりの作家たちの画業・書業を顕彰いたします。

戦後の日本美術についても、これまでの収集を補完する作品を近年数多くご寄贈いただいています。東京高等工芸学校(現千葉大学工学部)出身の土屋幸夫による房総スケッチや作家の軌跡をありありと示す油彩・版画・立体22点をはじめ、清水九兵衛の大型アルミニウム彫刻、高松次郎の1970年代の写真、井田照一のリトグラフ、八木正の立体造形などから、現代美術の諸相を探ります。

この5年間に新たに収蔵した作品の一部を、駆足でご紹介いたしました。改めて、美術館の活動が展覧会に足を運んでくださり、またさまざまなアドバイスや作品を寄せてくださるかたがたに支えら

れていることを痛感します。時代・造形ともに多彩な新収展をお楽しみいただくことがその返礼となり、さらなるご支援につながることを願ってやみません。

[学芸員 西山純子]



東洲斎写楽《三代目大谷鬼次の江戸兵衛》
寛政6年(1794)頃 千葉市美術館蔵



石井光楓《サボをはく男》
大正14-昭和6年(1925-31)頃 千葉市美術館蔵



竹久夢二『夢二画手本』2より 大正12年(1923) 千葉市美術館蔵



清水九兵衛《FIGURE16》1988年 千葉市美術館蔵

新収蔵作品展 写楽、夢二、そして房総ゆかりの作家たち

2009年2月3日(火)▷3月1日(日)

10:00—18:00(金・土曜日は20:00まで)

*入場受付は閉館の30分前まで

[観覧料]	一般	200(160)円
	高校・大学生	150(120)円
	小・中学生	無料

* ()内は団体30人以上の料金

*会期中は休館日なしで開館いたします。

ひらがなアート

チバトリ

2008年11月15日～11月30日

千葉大生を中心にまちの人たちとの共同プロジェクトとして毎年様々なアート・イベントを展開してきた「千葉アートネットワーク・プロジェクト(WiCAN)」。今年は16日間の会期を設けて、美術館と栄町のアートセンターを主な会場に、アートの祭典「～ひらがなアート～チバトリ」を開催しました。

チバトリのテーマは「等身大のアート」。私たちの暮らす今の日本のリアルな姿を反映した、借りものではない

「アート」を模索するというもの。企画は大きく3つに分かれ、「風俗美術館」、「ガリバー診療所」、「ラ・コトブキ」、これらに加えて、会期中には、参加作家によるパフォーマンスやワークショップ、シンポジウム、トークショーなども多数行われました。美術館での様子を中心に、写真を見ながら駆け足で振り返ってみましょう。

美術館のエントランスを入ると、そこには受付が設けられ、白衣を着た人々が…。木村崇人による「ガリバー診療所」は、エントランスから奥のスペースまでを広く使った体験型の作品です。「巨人の視覚」を体験できるメガネ等を用いて、日頃疑うことのない「見ること」への信頼を揺さぶるこの作品では、学生とボランティアスタッフあわせて40人近くが「ドクター」として案内役をつとめました。

「ガリバー診療所」の横を通り(あるいは区役所側の入り口からそのまま進んで)、その先のさや堂ホールで行われたのは、現代美術家たちによるグループ展「ジャパニーズ・リアル@チバ」、そして今後の活躍が期待される若手作家に焦点を当てた「チバトリ実験室」からなる「風俗美術館」です。チバトリを目当てに来てくださった方ばかりでなく、美術館の展示室や区役所に来られた方々が、中をのぞいては驚きながら楽しんで行かれる姿も見られました。

「風俗美術館」は、当館の重要なコレクションである浮世絵が同時代の都市風俗、庶民の日常を描き出すものであったことをふまえての試みでもありましたが、作品ごとの多様な切り口をお楽しみいただけたのではないのでしょうか。またこの企画では、アートセンターを会場に公募作品展「チバトリ・アンデパンダン」も行い、個性的な作品が数多く寄せられました。

美術館の東側、亥鼻地区の高台にそびえる千葉城(千葉市立郷土博物館)の姿にヒントを得た岡田裕子の映像作品「ラ・コトブキ～ニュージャポニズム・W(ウェディング)のすゝめ～」では、プロジェクトに関わる学生たちの世代がまさに直面する事柄としての「結婚」をテーマに設定。古今のしきたり取材し、短期間にセットや小道具を制作して撮影された作品



上：待合室からガリバートネルを抜けて診察室へ
下：ガリバーめがねを装着する参加者



「ガリバー診療所」の診察室



「視覚と行動の不一致」を体験



「風俗美術館」となったさや堂ホール



「ラ・コトブキ」千葉市立郷土博物館での展示



「愛」がテーマのトークショーの様子

は、各方面から多彩なゲストを招き、50分間にも及ぶ大作となりました。

ギャラリースペース等として今年も活動を続けている柴町のアートセンターでは、「チバトリ・アンデパンダン」の開催とあわせて、週末ごとにワークショップやトークショーが行われました。WiCANプロジェクトのホームとして、スタッフ、ゲストを問わず、様々な交流が生まれています。

最終日には、チバトリ参加作家をパネリストに迎え、「アーティストとして生きること」「日本人であること、表現すること」の二部構成によるシンポジウムを開催。今私たちが知りたい本当のところをパネリストに投げかけ、「等身大のアート」にふさわしい、本音トークも。29日の「柴町楽市バザール」への参加も含めて、実に盛りだくさんの16日間でした。

さて、アウトリーチとは言うものの、どうしたら人々を巻き込むことができるのか。それは、私たちが毎年取り組んできた課題と言えます。美術館について言えば、ビルの中にあつてふらりと立ち寄りにくい、両施設への来訪目的が交わらないなど、日頃マイナスの要素ばかりが目立つ区役所との複合施設という立地を生かして、チバトリや美術館が目的ではない人にも、アートに触れるきっかけを用意したい。また、プロジェクトの担い手である千葉大学の学生だけでなく一般の方々からもボランティアを募り、公開しながらある

程度の時間をかけてつくりあげてゆくプロジェクトにしたい。少なくとも、今年度掲げたこの二つの目標については、一定の成果が得られたと言えるのではないのでしょうか。

新しい作品、新しい価値、新しい体験が生まれる、作品と人との出会い、アートを介した人と人との出会い、あるいは新しい自分との出会いが生まれる。美術館は、つねに何か生まれる場であり続けたいと思っています。プロジェクトのトリを飾るトークショーのテーマは「チバトリはまた飛んでくるのだろうか」、その答えは、プロジェクトに関わった一人一人の目には、見えているに違いありません。

[学芸員 山根佳奈]

☆WiCANとは

千葉アートネットワーク・プロジェクト(WiCAN)は、千葉大学教育学部芸術学研究室、千葉大学普遍教養展開科目「文化をつくる」受講生を母体とし、アーティスト、美術館、まちづくりNPO、商店街など共にネットワークを形成し、社会におけるアートの様々な可能性を千葉において探求するプロジェクトです。千葉市美術館は、このプロジェクトに、アウトリーチ活動の一環として参加しています。

【WiCAN HP】 <http://www.wican.org/2008/>

ボランティア日和 episode18

「はじめまして、環境教育と美術鑑賞に興味を持っています。」と自己紹介をすると、皆さんは大抵困惑した表情をなさいます。

環境教育の目的は、持続可能な社会を維持するために自ら課題を発見し、行動、解決できる能力をもった主体性ある人材を育成しようというものです。さて、そこではいったい何が重要だと思われているでしょうか。仲間を作る協調性も必要ですが、問題を発見できる感性が最も求められています。

森へ行った。落葉を踏んで歩いた。虫を見つけた。どんぐりを拾った。スダジイを食べてみた。

森へ行くと、楽しかったり、気持ちよかったり、少しキケンでドキドキしたりワクワクしたりと五感が刺激されます。そして、そんな経験が子どもたちの感性を育てるのです。

私は、森と美術館はとてもよく似ていると思います。

美術館で、ある作品と出合って、自分の中にいろいろな感情がわき起こってくる。不思議なことを発見したり、楽しくなったり、なぜだか腹が立ってきたり、悲しくなったり、怖かったりする。「あれ？なぜこんな気持ちができるのだろう。」そうやって自分の心と対話をしてみる。それも感性を育てるひとつの方法だと思います。

感性で思い出したことがあります。ある美術展でモネの『睡蓮』を

見ていたときのことです。2-3歳のお子さんを抱いた方がいらっしやいました。その方が「ほら、お池よ。」とお子さんに話しかけると、お子さんは絵をじっと見たあと「カエルのうたがきこえてくるよ」と歌いだしたのです。私は、とても感動しました。そして、その光景は素敵な出来事として私の胸に焼き付いています。

また、ある美術展では中学生ぐらいの子どもたちが見に来ているのをみて、「なんで子どもが来るの？嫌ね。」というご年輩の方の悲しい言葉を耳にしたこともあります。

美術を鑑賞するのに、美術史や作家の生い立ち、社会的背景、その時代のものの見方など、たくさんの知識を求めて美術館へいらっしゃる方もいるでしょう。でも、私は勉強が苦手だったこともあり、そういった専門的なことはわかりません。徐々に勉強しているのですが、学芸員のようにはいきません。むしろ、子どもたちと同じように、自分の中にわき起こる感情をたよりに感性を磨き知識を増やそうと思います。

この絵の中で何が起きているのだろう。どんな感じがするかな。なぜ、そう思うのかな。あなたはと思う。

[美術館ボランティア 小沼 詩恵]

友の会バスツアー「八犬伝ゆかりの地南房総を訪ねて」が好評でした。

10月10日(金)、当館友の会会員向け日帰りバスツアー「八犬伝ゆかりの地南房総を訪ねて」を催しました。人気の展覧会「八犬伝の世界」関連企画であることに加え、当館友の会初のツアー企画とあってか、多数のご応募をいただき抽選となりました。

当日は快晴に恵まれ、館山市立博物館のご協力も得て、犬掛の里や伏姫籠穴などを見学し、充実した楽しいツアーだったとご好評をいただきました。

千葉市美術館友の会は、会員向けツアーの他にも様々な特典を用意して、皆様のご入会をお待ちしております。詳細は下記をご覧ください。



館山市立博物館にて



八犬士の墓と言われる場所の前で

◎千葉市美術館「友の会」会員募集中

会員の特典

- 会員は、企画展や所蔵作品展を年間、何回でも観覧できます。
- 会員の同伴者(3名様まで)は、団体料金で観覧できます。
- ミュージアムショップで、展覧会図録やグッズが10%引で購入できます。(一部除外あり)
- 11階「かぼちゃワイン」での飲食代が、5%割引になります。
- 展覧会や講演会等の美術館情報をお送りします。

	一般会員	学生会員 (大学・専門・高校)	ファミリー会員 (ご家族4名様まで)
入会金	1,000円	500円	2,000円
年会費	2,000円	1,000円	4,000円

入会の申し込みは美術館受付にて。

[お問い合わせ] 千葉市美術館 TEL. 043-221-2311

◎市民美術講座のお知らせ

「市民美術講座」は、市民のみなさまに千葉市美術館のコレクションを紹介し、作品についての理解を深めていただくものとして、2004年度より実施しております。

今年度は、「江戸」をテーマとして、当館スタッフが毎回わかりやすく解説します。参加は無料です。

[時 間] 14:00より(開場は30分前)

[場 所] 11階講堂

[定 員] 先着150人(入場無料)

○ 第9回 1月10日(土) 「地方画家と都、都の画家と地方」
[講師] 伊藤紫織(本館学芸員)

○ 第10回 2月28日(土) 「現代アートに生きる江戸
—浮世絵ポップ」
[講師] 水沼啓和(本館学芸員)



[交通案内]

- ◎ JR千葉駅東口より徒歩約15分
- ◎ 千葉都市モノレール県庁前方面行「霞川公園駅」下車徒歩5分
- ◎ バスのりば7番より大学病院行、または南矢作行にて「中央3丁目」下車徒歩2分
- ◎ 京成千葉中央駅東口より徒歩約10分
- ◎ 東京方面から車では、京葉道路または東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ、貝塚IC下車、国道51号を千葉市街方面へ約3km、広小路交差点近く
- ◎ 地下に駐車場があります

[編集・発行]

千葉市美術館
〒260-8733 千葉市中央区中央3-10-8
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chiba 260-8733, Japan
<http://www.ccma-net.jp>
[発行日] 2008年12月24日
[印刷] 半七写真印刷工業株式会社

 **千葉市美術館**
Chiba City Museum of Art